

## 平成 20 年度スタンフォード大学研修報告書

茨城県立こども病院 本元 強

### 参加した目的とその成果

今回の研修に参加した目的は、最先端の施設や研究に触れ、海外の優れた研究者達の考え方や過ごし方など、身につけられるものを全て吸収してくることでした。小児専門病院で働く放射線技師が最新の医療機器や研究に触ることは国内では難しく、このような研修に参加できて非常に幸運でした。

実際にスタンフォード大学では、7T MRI などを用いた研究の講義を伺いました。特に、最終日のMoseley 先生の「Molecular Imaging: Present and Future」と、Glazer 先生の「Forging The Future of Imaging」の話は、これから医療画像装置の未来を感じることができました。その他にも、プレゼンテーションのうまさ、コミュニケーションスキルの高さ、時間の使い方等、学ぶことが多かったです。そして今回感動したのは、スタンフォード大学で研究されている最先端の医療画像の美しさです。これから遠くない未来に、マルチモダリティイメージ・モレキュラーイメージング等の画像を扱う日が来ることを想像すると、今後放射線技師という職業がとても魅力的な業務になってくるなと実感できました。

### 日本と米国の放射線技師制度の違いをどのように感じたか

CT、MRI、3D Lab の専門スタッフから話を伺いました。特に CT、MRI の専門資格を取得したスタッフはやる気と仕事に対する誇りに満ちていて、「他の検査をやりたいとは思わない。」との話もありました。造影剤用のライン確保も技師が行うなど、業務の幅も広いようです。日本では、担当したい機器に必ずしも従事することができるとは限りません。米国の放射線技師の資格を取得した後に CT、MRI など画像装置ごとの専門資格を取得する制度は、「段階的なキャリアアップ」と「得意な画像装置の差別化」をする良い仕組みだと感じました。

### 今回の研修で得たことを今後どのように生かしたいか

印象に残ったのは、ランチの際にスタンフォード大学の研究者達が「結果を出し続けないと、ここに残れない。」と話していました。PhD や MD を持っていても、自分で研究資金を外から取ってこないといけないとのことでした。優れた研究者達・専門資格を得た放射線技師の姿勢を直接見て、話を聞くことができたことが私にとっての今回の収穫だったと思います。今後はまず研究について、できれば研究資金を得て論文を書けるような研究を進めていきたいと思います。そして仕事については、担当する全ての機器について米国の専門資格以上の専門性を高めて業務に望むつもりです。

最後に、このような素晴らしい研修の機会を与えて頂いた日本放射線技術学会の関係者の皆様、スタンフォード大学の皆様に感謝致します。また、今回の研修のリーダーを務められた島根大学の内田幸司先生、今回の研修参加を実現させて下さった茨城県立こども病院放射線技術科スタッフの皆様に感謝致します。

写真：綺麗に整備された病院内の庭園。  
病院内も外観も全てが最高の環境でした。

